



21 高松雄一先生のこと

今でもよく覚えている。大学2年時の秋深まるある日。大学で英文学入門の授業を受けた後、英文科進学者向けの「新歓コンパ」なるものがあった。

新歓コンパ！何という懐かしい響きだろう。バブルの盛り、世はどこも「コンパ」的な賑やかさに包まれていた。私たちの集合場所は、そんな喧噪が濃縮された渋谷109の前だった。

今や109は、法隆寺の五重塔のような歴史的建造物とみなされているだろうが、当時はまだまだ元気。そんな高々とそびえる109に負けじと、木枯らし吹かれて屹立しておられたのが、高松雄一先生だった。

「あれが、高松先生だ」とどこかから声が聞こえる。私はその崇高な風景に圧倒された。実に渋い。先生がwalking dignityと呼ばれたのもっともだ。

私にとって高松先生は大いなる謎だった。その後、数々の授業に出て、レポートや卒論にコメントをいただき、年賀状のやり取りもしたが（必ず「発展を祈りま

す」との一言が添えられている）、謎はむしろ深まった。

コンパの会場は、マッターホルンのごとき109の麓のくじら屋に設定されていた。福山雄一というボート部の学生が、「僕は高松先生と同じ雄一という名前なんで、ちょっとしたもんです。がんばります！」と自己紹介して高松先生の笑いをとり立派だった（名前出でごめん、福山君）。

実は、高松先生は笑い上戸なのだ。謎の核心はそこにある。先生は、ほんとはあちこちでお笑いになりたいタイミングがある。授業中にも、一度か二度、高松先生が吹き出す、という貴重な瞬間があった。しかし、ご本人はそれをご自分に禁じておられた。笑いたいけど、笑ってはいけないうの。ひょっとすると『ユリシーズ』の訳も、そこが醍醐味なのかもしれない。英文学を理解するためには、この謎をしっかりと認知する必要がありそう。遠く漱石と、18世紀英文学の世界にまで連想は及びそう。

（英文学者）